

研究分野	増養殖技術	部名	磯根資源部
研究課題名	藻場機能解析調査		
予算区分	国補 (県1/2)		
試験研究実施年度・研究期間	H.17		
担当	桐原 慎二・佐藤 康子		
協力・分担関係	漁港漁場整備課、外ヶ浜町		

〈目的〉

本県沿岸の代表的な藻場であるにはコンブ藻場（太平洋および津軽海峡沿岸）、アマモ藻場（陸奥湾）、ホンダワラ類藻場（日本海沿岸）について、それら藻場が果たしている漁業生産上の役割や機能をまとめる。

〈試験研究方法〉

既存資料を用いて、コンブ藻場、アマモ藻場、ホンダワラ類藻場の機能を検討した。あわせて、これまで十分な調査がなされていないエゴノリ漁場としてのホンダワラ類藻場の役割を把握するため、平成16年11月18日に、室内培養によって得たエゴノリ果胞子体約300gを入れた網袋（カルボスポアーバック）を、三厩村六條間地先のホンダワラ類群落中の水深4.5mに設置した。平成17年2月18日及び6月15日に設置場所から20mの範囲内にある計24地点で、生育する海藻を0.5m四方の枠を用いて枠取り採取し、種毎に湿重量を測定した。ホンダワラ類については主枝の長さを測定し、果胞子の着生密度を調べるため、付着器で着生したエゴノリ四分胞子体の個体数を求めた。

〈結果の概要・要約〉

平成17年2月には、調査地点を通じてヨレモク、ジョロモク、トゲモク、フシスジモクの4種のホンダワラ類が採取され、各々の現存量は1,671.5g/m²、4,765.7g/m²、273.7g/m²、287.0g/m²であった。ジョロモク、ヨレモクは、各々総海藻現存量の68.1%、23.9%を占めた。エゴノリは、カルボスポアーバック設置時には試験地に見られなかったが、平成17年2月には、計24地点から枠取り採取されたホンダワラ類のうち21地点のヨレモク、ジョロモク、トゲモク上に、エゴノリ四分胞子体が付着器で着生していた。その密度は、主枝10cmあたりに0.003~0.174個体、平均0.026個体であった。また、カルボスポアーバック設置場所から10mの範囲に、付着器で着生したエゴノリ個体の84.7%が着生し、カルボスポアーバック設置場所近傍で高密度な傾向がみられた。漁期直前の6月には、カルボスポアーバック設置場所から10mの範囲にエゴノリが平均608.0g/m²の密度で生育していた。エゴノリ好漁場とされるヨレモク卓越群落では、主枝10cm当りに0.018個体のエゴノリ四分胞子体が付着器で着生しており、漁期にはエゴノリが約600g/m²の密度で生育していたことから、本手法により天然漁場より高密度にホンダワラ類にエゴノリ果胞子を着生することができ、エゴノリ生育量を増大できると考えられた。

以上の結果を含め、「青森県沿岸の藻場機能」としてとりまとめた。